

シナハナムグリの生態的知見

境 良朗

シナハナムグリ *Protaetia famelica scheini* Mikšic, 1959 は日本では対馬だけに産する大陸系のコガネムシである。国外では朝鮮半島、中国に分布し、対馬産は朝鮮半島亜種とされる。シロテンハナムグリやシラホシハナムグリに比べて二回りほど小さく、跗節が暗緑色に輝くのも特徴の一つである(写真1)。生態については、周年経過として、「…5月には越冬明けと思われる擦れた個体ばかりで、8月には新鮮な個体が見られることから、初夏に産卵、晩夏に新成虫が羽化というサイクルが想定されるが…」と予想し「1年1化」であること、訪花植物として、「…トベラ、ネズミモチ、ノイバラ…」が記載されている(岡島・荒谷他, 2012)。



写真1 対馬産シナハナムグリ

筆者はここ3年(2018~2020年)にわたり本種を観察する機会があり、若干の生態的知見を得たので、今後の課題も含めて報告する。

配偶行動

・1ペア+1♂+3exs., 7-V-2019, 対馬市厳原町豆酸崎. 天候: 晴 14:11~ (写真2・3)

風も弱く、気温も上がった午後、交尾を見ることができた。地上50cmほどの枯れたアブラナの茎に6頭が集まっていたが、いずれも新鮮な個体であった。交尾中1ペアの他に交尾器を盛んに出している♂が見られたが、他の3個体は交尾器は確認できなかった。恐らく交尾中の♀を除いて全て♂ではないかと思うが、本種は外見上の性差が軽微で確定できなかった。♀の出すフェロモンに誘引されたと思われる。本事例は特別で、通常の交尾は樹冠付近の高所で行われているのかもしれない。



写真2 交尾器を出す♂ (一番下)



写真3 交尾個体に群れる♂

訪花植物

岡島・荒谷(2012)に記載されている3種の内、ノイバラは追認できなかったが、新たにスタジイ、オオバイボタ、カシワ、ハゼノキ、スイカヅラの花に集まる個体を確認した(写真4・5)。

吸汁

・3exs., 30-V-2019, 対馬市厳原町豆酸崎. アブラムシの付いたカシワから採集

コアオハナムグリが群れるように飛んでいるカシワがあったので見てみるとアブラムシが付いていた。アブラムシの出す甘露に誘引されたと思われる。掬ってみるとコアオハナムグリと一緒に

に本種が落ちてきたので、吸汁していた可能性が高い。また、ビワの実にシロテンハナムグリとともに吸汁に集まっているのも観察している。樹液吸汁はまだ見ていない。



写真4 ハゼノキに訪花



写真4 ハゼノキの花粉を舐める

周年経過

3年間の観察では次のようなことが分かった。

- 1) 5月上旬～6月上旬にかけて多くの個体を確認したが、ほとんどが新鮮な個体であった。新鮮な個体の体表には、コアオハナムグリに見られるような越冬時に付いたと思われる泥などが付着していることはなかった。
- 2) 擦れたり、跗節が欠けている個体もいたが全体の約10%程度であった。
- 3) 5月上旬に交尾個体が観察された。
- 4) 2018年5月に採集した個体から産卵させた結果、その年の夏に成虫は羽化してこなかった。(日下部氏, 私信)
- 5) 晩夏に新成虫が羽化するというが、今のところ未確認で、どの程度発生しているのかは分からない。発生しているとしても極わずかではないかと思われる。

これらのことから、初夏に現れる多くの新鮮な個体を新成虫と考えたと、生活史については次のような仮説が考えられる。

〈仮説1〉

幼虫(蛹)越冬で、ほとんどは初夏に新成虫となるのが基本。ただし、一部の羽化が晩夏までずれ込むことがある。この場合、休眠室で越冬した幼虫は翌春に目覚め、摂食後蛹化する。あるいは、蛹の状態で蛹室内で越冬する。

〈仮説2〉

仮説1と同様に幼虫(または蛹)越冬で、ほとんどは初夏に新成虫となるのが基本。産卵後、一部がその年の夏季に新成虫となることがある。この場合、夏季の新成虫が成虫越冬している可能性があり、初夏に見られる擦れた個体に繋がっている。この仮説の問題点は*Protaetia*属の種は後食を行い、寿命が比較的長いことである。初夏に羽化した新成虫が越冬することなく、越冬前に生を終えるといえるだろうか。2年1化を予想する(日下部氏, 私信)考えもあり、今後も小さな事実の断片をつなぎ合わせて、生活史の解明に近づければと思っている。

最後になるが、日頃より対馬の昆虫全般について情報交換いただいている日下部満氏にお礼申し上げます。

引用文献

岡島秀治・荒谷邦雄他, 2012. 日本産コガネムシ上科標準図鑑. 318